

座談会当日のご質問

<p>苧宿</p>	<p>雑草・ヒエなどが多く発生した。</p>	<p>特定の雑草が多いようであれば、使用する除草剤の種類を見直し、多く発生している草種に効果のある薬剤を選択する。</p>
<p>苧宿</p>	<p>背白・腹白米あり2等米の結果になった。</p>	<p>以下の点に留意してください。 ①土壌管理: 作土層を15cm以上確保し根の生育促進、堆肥や土壌改良資材の活用による地力向上を図る。 ②作期の移動: 早期出穂による登熟期の高温障害を避けるため早植えに留意する。 ③適正籾数の確保: 1株あたりの植付本数は2～3本/株を目標に、ほ場の土壌特性に併せて適正な籾数となる範囲の窒素量を確保する。 ④栄養陥落の防止: 高温が続くと生育途中で肥切れとなることに留意し、稲体の生育量(葉色)を把握し、適正な追肥を行う。 ⑤水管理: 登熟期間の水管理は間断かんがいの徹底と高温対策として用水の掛け流しによる地温低下による根の活力維持。また、早期落水は登熟不良や白未熟粒の発生要因となるため、登熟期後半まで水分確保に留意する。</p>
<p>苧宿</p>	<p>天のつぶでカメムシ被害が多くあった。</p>	<p>防除が適期に実施されているか、また、近隣で防除実施していない飼料用米ほ場などがあると、主食用米ほ場にも被害が広がる恐れがあるため、少なくとも1回は飼料用米ほ場でも防除を実施する。</p>
<p>苧宿</p>	<p>畦畔の草刈りまた水管理も課題。どうしたら良いか。</p>	<p>畦畔除草剤の併用による草刈り回数の削減や、ほ場によっては水管理システムの導入等による労力削減を検討する。</p>
<p>苧宿</p>	<p>玉ねぎはべと病の発生と腐敗病により多量の廃棄が出た。原因、対策は。</p>	<p>以下の点に留意してください。 ①今年夏は暑さにより、苗の不揃い・定植の時期のズレが生じたので越冬前に生葉数4枚を目指し、定植後の葉色が悪い場合は速やかにアミノ酸系の葉面散布の実施。 ②降雨が少ない場合、根からの肥料の吸収が足りなくなるため、必要に応じてかん水や液肥の使用に切り替える。 肥料の溶けが悪い⇒雨で一気に溶ける⇒多肥状態⇒腐敗果増加となる！ ③ほ場を巡回する際に「べと病」の1次感染株・2次感染株を確認し抜き取って、必ずほ場外へ廃棄する。 ④腐敗果対策の「アザミウマ類」防除は気温の推移と発生状況の確認から。 ⑤フザリウム及びりん茎腐敗症(腐敗病)は高温多湿時に多発する傾向があり、特にフザリウムは20～23℃の多湿時が最適で、他に窒素過多、酸性、連作等が発生を助長すると言われており、毎月の指導会には必ず土を持参し、簡易検査ではほ場のpH6以上を維持し、過剰な窒素追肥を抑える。梅雨に入る前には軟腐病対策として銅剤等の予防剤を十分散布する。</p>

苧宿	年々、高温に悩まされ作付の品種を考える時期なのか。また、直播栽培技術の導入も検討すべきなのか。	高温対策については、比較的高温耐性の強い品種の導入や移植時期をずらすことにより、作期分散を図ることが必要。直播栽培の導入も、作期分散・田植え省力化の観点からは、効果的。
西台	雑草対策(ヨシの根・カヤの根)の処理で悩んでいる。対策は。	クロレートS、デズレートAZ等の薬剤が効果的。このうちクロレートSについては、営農再開支援事業の活用により、町の方で複数の生産組合へ配布される。
藤橋	毎年消えない雑草に苦しんでいます。一発除草剤を使用していますが、除草剤を変えた方が良いですか。	特定の雑草が多いようであれば、使用する除草剤の種類を見直し、多く発生している草種に効果のある薬剤を選択する。
藤橋	高温障害における水稻の作付時期を教えてください。(くデータを分析した結果等を共有して)	その年の気象条件が高温になるか、ということをはっきり示せないため、リスク分散のため、高温耐性の強い品種の導入や作期の分散に努めてほしい。試験場で実施している結果などで示せるデータがあれば、共有させていただく。
酒田	コシヒカリは等級が落ちた。原因と対策は。	今年度は、高温による白未熟粒の増加等が要因と思われる。特に作期分散、水管理の対策等を徹底してほしい。
幾世橋	雑草の対策が後手になった。今後、どうしたらよいだろうか。	面積拡大や多品目への取組による労力不足が懸念される。今後、JA、普及所と連携し計画的な栽培体系の再構築を図るとともに、作期分散や省力化を念頭に見直しを行いましょう。
幾世橋	水稻で圃場の均平化がとれず苗がとろけたところがある。どうしたら良いのか。	可能であればレベラー等も活用し、水田の均平をしっかりとるようにする。
幾世橋	ソバの播種時期、収穫時期の見直しの考え方は。	特に高温対策については、極端な早播きを避け、播種時期を分散する。
立野上	ソバの交配が良くなく収量減。ソバ・ナタネは雑草のため減収した。対策は。	今年度のそばは、高温により、花粉の形成や交配に影響がでて、不稔になった可能性がある。耕種的には、極端な早播きを避け、播種時期の分散を図ったほうがよい。

立野上	ソバの巡回をお願いします。	作業時期、生育ステージに合わせて適宜巡回し、情報をお繋ぎする。
立野上	田んぼの雑草管理、ヒエなどが多くなってきた。除草剤のローテーションが必要あるのか。	特定の雑草が多いようであれば、使用する除草剤の種類を見直し、同じ薬剤の連用は避けたほうがよい。

座談会当日のご意見

権現堂	2023年の高温障害が大きく、ぶどうの花落・落木があり当初想定した収益を大きく下回った。また、苗についても定植苗育成が大きく、棄損されており通年より1カ月定植が遅れています。
権現堂	ぶどうの根圏制御栽培は、5年前から川内村で実証栽培がされており、双葉地域において50-60名の生産者が栽培しています。ぜひ、ふたばの地域ブランドの確立についてJAさくらさんをはじめ、関係機関のご助言をいただければ幸いです。
樋渡	高温によるヨトウムシの被害が大きく防除の回数が多かった。
樋渡	圃場の排水が悪いところが多く雨が降ると圃場に残る。排水対策が必要と感じた。
立野上	水稲で昨年は除草防除がうまくいかず、雑草がのびすぎて農薬の効き目が効かなかった。
立野上	たまねぎ収穫の際にハーベスターの性能をフルに発揮できず大変な作業になった。

町回答案

除草剤を散布しても雑草が多発する場合、主に①散布時期が合っていない、②使用している除草剤が問題となっている雑草に合っていない、の2つが考えられる。JAや普及所に相談する際は、栽培管理と農薬散布の履歴があるとの的確な対策を講ずることができる。

以下の点に留意してください。

①土壌管理:根張りを良くするために、耕耘時の作業深は15cmを目標とする。堆肥や土壌改良資材の活用による地力向上を図る。

②作期の移動:早植えは出穂が早まって高温障害を受けやすくなるので、適期移植を心掛ける。

③適正籾数の確保:籾数過剰は品質低下の原因となるので、分けつ過剰とならないように、1株あたりの植付本数は2~3本/株を目標にする。また、ほ場の土壌特性に併せて適正な基肥窒素量となるように施肥量を設定する。

④栄養陥落の防止:高温時に葉色が薄くなると登熟歩合が低下して品質も下がるので、長期予報等で高温が懸念される場合は幼穂形成期~減数分裂期の追肥を検討する。

⑤水管理:登熟期間に土壌水分が低下すると収量・品質が低下するので、出穂後30日間は間断かんがい等により田面が乾ききらないようにする。ただし、高温時は、間断かんがいを続けると品質が低下するので、かけ流しまたは常時湛水に切り替える。

天のつぶは割れ籾が生じやすく、籾の割れ目からカメムシに吸汁されやすいので、以下の点に留意する。

①カメムシの適期防除に努める

②幼穂形成期の窒素不足は籾殻を小さくするので肥料切れに注意する。

畦畔除草剤の併用による草刈り回数の削減や、ほ場によっては水管理システムの導入等による労力削減を検討する。

以下の点に留意してください。

①今年は夏の暑さにより、苗の不揃い・定植の時期のズレが生じたので越冬前に生葉数4枚を目指し、定植後の葉色が悪い場合は速やかにアミノ酸系の葉面散布の実施。

②降雨が少ない場合、根からの肥料の吸収が足りなくなるため、必要に応じてかん水や液肥の使用に切り替える。

肥料の溶けが悪い⇒雨で一気に溶ける⇒多肥状態⇒腐敗果増加となる！

③ほ場を巡回する際に「べと病」の1次感染株・2次感染株を確認し抜き取って、必ずほ場外へ廃棄する。

④腐敗果対策の「アザミウマ類」防除は気温の推移と発生状況の確認から。

⑤フザリウム及びりん茎腐敗症(腐敗病)は高温多湿時に多発する傾向があり、特にフザリウムは20~23℃の多湿時が最適で、他に窒素過多、酸性、連作等が発生を助長すると言われており、毎月の指導会には必ず土を持参し、簡易検査では場のpH6以上を維持し、過剰な窒素追肥を抑える。梅雨に入る前には軟腐病対策として銅剤等の予防剤を十分散布する。

「虹のきらめき」は「天のつぶ」より高温耐性に優れていると推察されるが、耐冷性が「弱」なので、導入する場合は耐冷性に優れる「コシヒカリ」などと組合せた方が気象による減収等のリスクを回避しやすい。直播栽培も、移植栽培と組合せると、気象災害のリスク分散だけでなく、田植えや収穫作業を分散出来て作業負担を軽減できる。

水稻の場合は、塩素酸ナトリウム粒剤(クロレートS、デゾレートAZなど)の収穫後散布が効果的とされている。管理耕作ほ場は掛かり増し経費で見ることとなるが、自作地の場合は営農再開支援事業の別メニューが使える場合もあるので役場に相談してほしい。

除草剤を使用しても雑草が消えない場合、①使用している剤が対象雑草に効きにくい、②散布時期が雑草の生育時期に合っていない、③実は効いているが後からまた発生している(土中に雑草種子が蓄積している)、などの原因が考えられる。使用している除草剤と、問題となっている雑草から原因が推測できることもあるので、JAや普及所に相談してほしい。

育苗期～田植期の4～5月に冷夏または猛暑を予測することは難しい(JAや普及所の範疇を超えている)ので、品種や作期、栽培方式の分散によるリスク分散が現実的な対応となる。全ての対策を講じるとかえって非効率的となるので、可能な範囲で複数品種や作期分散の導入を検討してほしい。

コシヒカリは食味向上のために窒素施肥量を減らすことが多いが、高温時に窒素が不足すると白未熟粒の発生等による品質低下が起こりやすい。よって、高温が予測される場合は、水管理だけでなく、幼穂形成期～減数分裂期の窒素追肥も検討する。

質問のとおり、雑草対策は後手に回る(雑草が目立ってきてから除草剤を撒く)のではなく、先手を打つことが重要となる。ほ場に蓄積されている雑草種子が残っている間は追加防除等が必要となるが、適切な除草体系により雑草種子量を年々減らしていくことが出来れば、年間の除草剤使用量を減らしていくことも可能となる。

不陸が懸念されるほ場では、レーザーレベラー等による均平工が必要となるほか、草丈が長く活着の早い中苗以上の苗の導入も検討する。また、靱枯れ細菌病等の病害により移植後の苗がとろけることもあるので、移植前の苗に病害が発生していないか注意する。

7月中旬より前の早播きは、8月の猛暑とソバの開花期が重なって不稔等が発生するリスクがある。一方、お盆以降の遅播きは、十分な生育量が確保できず減収する可能性がある。よって、播種適期(7月下旬～8月上旬)以内で播種時期を分散したり、適期内に播種作業が完了できるように播種前からの排水対策(暗渠・明渠の施工)を心掛ける。

夏の高温は、ミツバチの活動を抑制する以外にも不稔の発生などソバの減収につながりやすいので、7月中旬より前の極端な早播きは避ける。また、畑作物は生育期間中に使用できる除草剤が少ないので、排水対策を徹底して初期生育を確保し、雑草が発生する前に作物でほ場を被覆するなどの耕種的な対策が必要となる。

作業時期、生育ステージに合わせて適宜巡回し、情報をお繋ぎする。

除草剤の効果が薄れてきていると感じる場合は、①現在の除草体系が効きにくい雑草が拡大再生産している(毎年種子を残している)、②特定成分に抵抗性のある雑草が出て来ている、といった原因が考えられる。